武生ルネサンス通信

2017.9.3

277 号

9 月例会のお知らせ

日　時　　：　9 月 23 日（土）　19:30～21:30
場　所　　：　府中町屋倶楽部
内　容　　：　紙芝居　「老いもまた楽し」
　紙芝居師　馬田　昌保　氏

馬田さんは、本業の洋装店から身を引かれて以来 10 年毎に熱中することを変えて、50 代で小説を書き、60 代では絵を描き, 70 代で紙芝居を作り演じることに情熱を傾けておられます。『水仙は見ていた』を福井新聞で連載したほどの作家で、絵も上手く、声がよくて、人前で喋るのがお得意なのですから、創作紙芝居師というのは、ピッタリではないかと思います。

■現在は旧暦の七月（文月）。二十四節気では、七月二日(8/23)が暑さも収まるという「処暑」、七月十七日（9/7）はこの頃から秋気が進んで露を結ぶとされる「白露」で、「立秋」から丁度一ヶ月目に当たります。この頃に吹く風を「白秋」とか「色なき風」（白を言い換えている）と言いますが、「白露」とか「白秋」とかの「白」は、五行思想によると秋の色です。五行思想というのは、古代中国で生まれた自然哲学で、「万物は木、火、土、金、水の五種類の元素から成り、それが互いに影響を与え合い、その相互作用によって万物が変化し循環する」という思想です。四季の変化もまたこの五行の推移によって起こるものと考えられ、「青春、朱夏、白秋、玄冬」と、季節に色が当てはめられています。「吹きぬれば身にも沁みける秋風を色なきものと思ひけるかな」（紀友則『古今六帖』）

■さて今月の例会は、上記の通り、馬田さんに創作紙芝居をやっていただくことに致します。８月 26 日､27 日と長野市で｢全国紙芝居大会｣が開催されましたが、4 年後には、越前市でこの全国大会を催すことになっているとかで、その準備もあり、越前市から馬田さんはじめ何人も参加されたようです。考えてみますと越前市は紙芝居との縁は浅からぬものがあります。先日中央公園に加古里子さん監修の「だるまちゃん広場」がオープンしました。既にかこさとし絵本館もありますし、市バスや図書館のカードなどにも加古さんの絵が使われています。このかこさとしさんの絵本作家としての始まりは、1950 年代、東大の学生としてセツルメント活動で紙芝居をなさっていたことです。セツルメント活動というのは、貧しい人が多く住む地域に定住して、住民と親しく触れ合うことによって、その生活の向上に努める福祉救援活動のことです。紙芝居は演劇でありながら、最も少ない人数でやれますし、場所も選ばず、手軽に人を楽しませることが出来るものです。私達の子供の頃は、町内の広場へ自転車に紙芝居の小道具を積んだおじさんがやってきて、拍子木を打ち、水あめを箸の先につけたものを売ってから、話をしてくれたものです。それには読み手と聞き手が一体化した楽しさがありましたが、テレビの登場によって衰退してしまいました。紙芝居は日本独特の文化です。昔から日本には「絵解き」と言って絵を見せながら物語を語って聞かせる伝統がありました。『源氏物語』にも女房たちが絵巻を見せながら物語る場面がありますし、寺では僧が曼荼羅や寺の縁起を絵解きで参拝者に聞かせていました。